

Wat00037 <Journalism Inside>地域土着はマスコミの生命線！？

#0000 dando 8809101614

<Journalism Inside>地域土着はマスコミの生命線！？

by 大阪科学部・団藤

サイエンスネットとのお付き合いを、もうしばらくで終わりにしたいと思っています。理由は敢えて記しませんが、このネットの現状に納得がいけないからとしておきましょう。

年初以来、原子力発電のボードを中心に、ずいぶん禁欲的、自己抑制的なサポートを続けて来たので、最後は言いたいことを言っておこうと、必ずしも科学と関係ない<Journalism Inside>コーナーを、勝手に作ることにしました。「納得がいけない現状」を補う意図も含めています。

最初のテーマは、マスコミに刻印されている地域主義の影です。マスコミは不偏不党を標榜していますから、はるか天上から地上で起きる問題を分析しているような錯覚をお持ちの方がいます。実は、新聞を印刷したり、電波を出している当のその地域に強く縛られているのです。反原発グループが8月下旬に北海道で展開した、「原発泊（トマリ）記念日」行動の報道を入り口にして、次の関連発言で考えてみましょう。

#0001 dando 8809101616

なぜ、「原発泊（トマリ）記念日」行動は”無視”されたか

by 大阪科学部・団藤

2月の伊方＝高松3千人集会、4月の東京2万人行動の高まりをうけて、8月の「原発泊（トマリ）記念日」行動はどうなるのか――わたしなりに注目していたのですが、新聞報道はほとんどゼロでした。大阪の紙面にまでは載らないのか、と思っていましたら、東京はもちろん、北海道の現地ですら逮捕者が出た程度にしか報じられていないことを知りました。

気になったので、自前のルートでちょっと調べてみました。”無視”は、全国紙の5大紙だけでなく、地元の北海道新聞も同じだったようです。わたしが渦中にあった伊方のときに比べて、3~400人という規模の小ささを考えに入れても、「冷たい」あしらいに見えます。新左翼運動を対象にした公安事件の扱いみたいではありませんか。そこで、マスコミ側から、この行動はどう見えたか—ここはむしろ、朝日以外の人から取材してみました。

取材したマスコミ側は、一連の動きのヤマ場は、その前にあった泊原発への核燃料搬入阻止闘争だと考えていたようです。おまけに、九州などから北海道入りした市民グループが中心、現地からの参加者はわずかで、北海道のマスコミにとって、言わば「異邦人」との印象をもたれたように感じられました。お断りしておきますが、北海道の人は、もともと、ほとんどの人が移入者ですから、よそ者を排除する風はあまりないところです。

これに対して市民グループは、「チェルノブイリの死の灰は、遥かに離れた日本にも降った。泊原発でもし事故があれば九州も北海道も同じだ」との論理で立ち向かったようです。しかし、北海道のマスコミには通じなかった、としか思えぬ結果でした。現地のマスコミが書かなければ、東京にも大阪にも記事が載る訳がありません。

伊方出力調整試験問題でも同じ論理が語られました。九州から関東以東まで多くの人が共鳴して、高松に駆け付けました。泊と差があったのは、四国の現地も沸き上がっていたことだと思います。わたしが取材した限りでは、小原さんたちの市民グループは、形の上では同じ行動をとりながら、現地の草の根と結合する力が前回より際立って弱かったようです。現場にいないわたしには分かりませんが、”自由な個人の自由な結合”といった、グループ特有の基本原則に立たない人は出て行ってもらったためだとしたら、原発反対のために運動があるのか、運動のために原発反対があるのか、定かでない不思議なことになります。そして、その地域にいる人達を巻き込まない運動は、マスコミから注目されなくてもやむをえない面があります。マスコミは、存在している地域の空気を呼吸し、地域の人の動きを肌で感じて走りだします。頭で理解して動きだすことは、むしろ少ないように思えます。営業成績や、広告を増やすためだけでない、マスコミ人の生理のようなものです。

今年はじめ、各地の新聞社は、敢えて「組織的」と呼びたい原発反対の投書の山に見舞われ、やがて全国的な反対運動の高揚を迎え

ました。にもかかわらず、このネットの原子力発電ボードでも盛んに発言があったとおり、朝日新聞東京本社の紙面は反対運動の全国的な進展に、著しく立ち遅れました。伊方が大阪本社の管内にあったことも一因です。それでも、2万人行動が東京であり、チェルノブイリ2周年だった4月には、それなりに積極的に紙面化し始めます。記事データベースで、4月中に「原発」が登場する記事を拾うと、60件にのぼります。同じことを、読売新聞の記事データベースですると、25件しか出てきません。両者の共通部分は、外国ニュースだったり、官庁物などですから、少なくとも読売新聞に比べて手厚いことは確かです。一覧表にすると、科学部や社会部だけでなく、いろいろなセクションが動き出していることが分かります。

マスコミ、特に新聞には抜き難い「地ダネ」意識があります。出来れば、地域の話で紙面を埋めたい、出来るだけ大きく扱いたい。いえ、その意識があるからこそ、存在しているとも言えます。地域に密着していると言われることは、勲章のようなものなのです。こんなエピソードがあります。全日空のPR誌だったでしょうか、各地方紙の記者にその地方の料理を紹介させる企画を取り上げたことがあります。そのとき、大阪は朝日新聞だったので、大阪本社編集局の幹部が「大阪の地元紙はやっぱり朝日だと認められた」と、かなり素直に喜びました。ご存じない方のために、注を入れますと、大阪は朝日創刊の地です。

科学部員は、科学の真理はどこでも真理というわけで、コスモポリタナな面が強いのですが、100年を超す新聞の組織はそのように出来ていません。全国紙とは何なのか。その問題は、稿を改めて考えてみましょう。